



2015年7月発行

## イエスの死

「イエスは大声で叫ばれた。『父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。』」

(ルカによる福音書 23章 46節)

イエス・キリストの死は、私たちにとって一つの終わりではありますが、それと共に新しい始まりでもあります。

主イエスは十字架の上で、生涯のいちばん最後の瞬間に「父よ」と叫ばれました。主イエスはそのことによって、ご自分が究極的に誰と結ばれているのか、どこに向かっておられるかを明らかにして下さいました。主イエスは天の父と結ばれておられます。主イエスのこのお姿は、私たち人間が根本的なところで誰に結ばれているのか、また万物が究極的にどこに向かっていているのかということをも明らかにしています。

当然のことですが、主イエスはこれを十字架刑の想像を絶する苦しみの中で言われたのです。その苦しみは、決してイエス様ご自身の罪が招いたものではありません。「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」(マタイ 26:28) 十字架の苦しみは、イエス様が私たちを含む全人類の罪を背負って神の裁きを受けたことによるものです。

主イエスはこの苦しみがなんのためなのかということをはっきり理解しておられました。それは父なる神がイエス様に与えられたものです。主イエスは、父なる神がこれをご自分の上に与えられたこと、だから父の許しが必要ならば人間は何も出来ないことを知っておられました。父なる神のみこころは人間を罪から救い出すことであり、このことを主は父なる神との愛と信頼関係の中で完全に理解し、同意して、それに従われました。ですから、主が最後に呼びかけられるのは父なる神をおいてないのです。

それでは、父なる神の御手にゆだねると言われる「霊」とは何でしょうか。天地創造の物語の中に、「主なる神は土の塵で人を形づ

くり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創世記 2:7)と書いてあります。この「命の息」と「霊」は同じです。神から霊が吹き込まれることで人は生き、霊が取り去られることで人は死ぬのです。霊とは、人間のもっとも奥深い中心です。よく魂と一緒にされて靈魂と言われますが、魂とは別のものです。主イエスはこの霊を父なる神のみ手にゆだねました。「父よ、わが霊をみ手にゆだねます。」とは、父なる神に対する全き信頼の告白です。

主はこのとき両手は十字架の横木に打ちつけられたまま、腰を腰掛と呼ばれる木片でかくも支え、両足は柱に打ちつけられていました。つまり足を支えるものは十字架しかなかったのですが、そのお心は詩編 31編 9節で、「あなたは、…わたしの足を広い所に立たせて下さいました」と歌われているとおります。父なる神はイエス様の足を広い所に立たせて下さいました。それは、文字通り何ごとも動じない姿です。苦しみのきわみの中で主イエスは死んで、陰府に下られます。しかし、どこに行かれようとも、父なる神から離れてしまうことはないのです。

主イエスがこのように、ご自分の霊を父なる神にゆだねられたことは、主イエスお一人にだけ関わることはありません。宗教改革者カルヴァンは、「このとき主イエスは、ご自身の霊と共にすべての者の霊を束ねて一緒に父のみ手にゆだねて下さったのだ」と書いています。主イエスは私たちの霊を、そしてすべての隣り人の霊を、ご自分の霊と共に父なる神の恵みのみ手に委ね、托して下さいました。

強盗でさえも主イエスに会って救われたのです。だから、立派な人ばかり集めて連れて行かれたものではありません。イエス・キリストが共におられるということにこそ、決して揺らぐことのない救いの確かさがあります。十字架のそばでは、全く新しい歴史が始まっていたのです。

(2015年7月12日の家族礼拝の説教より)

牧師 井上 豊